

文： アレクサンダー・ヴェルナー

2009 年 11 月 7 日土曜日 0 時 15 分

カルロス・クライバーおよびアルバン・ベルクが父親であるとの噂についての最新の寄稿

アルバン・ベルクの醜聞

— カルロス・クライバーは誰の息子か。

(写真はルース・クライバー、1953 年ミュンヘンにて)

繰り返し声高になる噂がある。カルロス・クライバーが、実はエーリヒ・クライバーの息子ではなく、作曲家アルバン・ベルクがこの偉大な指揮者の妻と関係して生まれたというのである。

ベルクが、あるすぐれた指揮者の妻と関係を持ったというのである。しかし確かな根拠があるのは、1925 年、作家フランツ・ヴェルフェルの姉妹、既婚のハンナ・フックスに対して、ベルクの愛が燃え上がったということのみである。10 年以上もの間、彼は彼女に燃えるような恋文を書いていた。

エーリヒ・クライバーは外向きにはあれほど冷静な印象を与えたかもしれないが、彼もまた、一人の女性に対して深い感情を打ち明けていた。但しベルクとは異なり、自身の若き妻に対してではなく、アメリカ人のルース・グッドリッジに対してである。1926 年に彼女が結婚した後、彼は読み心地の素晴らしい手紙の中で、彼女に再三再四愛を明らかにしていた。

同時代の証人たちは、非常に幸福で愛情の深い夫婦関係という印象を持ったばかりでなく、ルースが夫をどれほど明白に尊敬し、献身的に尽くしたかを語ってくれた。二人は家族に憧れ、すでに間もなく 1928 年 3 月には娘ヴェロニカが生まれ、それから 1930 年 7 月には息子カール・ルートヴィヒが生まれた。したがって噂を信じようとするれば、ルース・クライバーが、まさにこの情緒的で打ち解けた親密な時代に、夫を欺いたことになる。しかもそれが、よりによってクライバーの信頼していた人物との関係だったことになる。クライバーはベルクのために、あれほど多くのことをしてきていたし、当時もしていたので

ある。しかもベルクは、別の女性への恋愛感情に溺れていたのである。

カルロス・クライバーの伝記のために長年調査していた間、そのような手掛りは何ら見つからなかった。せいぜい手掛りと言えば、その噂の出所がオーストリアの作曲家ゴットフリート・フォン・アイネムであったことのみである。噂がウィーンから出た後、そこでとりわけ肥沃な土壤に落ちたことは明白である。ウィーンで愛されなかったエーリヒ・クライバーは、故郷では一生苦しい立場であった。そのような事情から、多くの人々の目にはアルバン・ベルクの方が、偉大なカルロス・クライバーの父親としてはるかに快く映ったのかもしれない。しかもこの命題をもってすれば、父親とのカルロス・クライバーの関係があれほど難しかったと常に描写されることが、心理的にはいとも簡単に説明されたのである。

しかし、カルロスが一生担った父の重荷は、音楽的なものに集中していた。文献に基づく全く新しい父子関係の評価にもかかわらず、期待される確固とした無慈悲な父親像を揺るがすのは難しい。二人の手紙からは父の愛と息子の愛、二人の良好な関係、さらには息子の将来に対する父の不安も読み取れる。一方、入手できる限りの証拠からは、ベルクとルース・クライバーのより親密な関係を少しでも暗示するようなものは、一つもない。最終的に解明するには遺伝子分析しかないだろう。仮にルースが関係を持っていたとしても、それは何の証拠にもならないからである。

そんなわけで、写真の比較が再三再四引き合いに出されるのである。そして見る人によってそれぞれ、カルロスとベルクとの類似点が、多かれ少なかれ見えてくるのである。エーリヒ・クライバーは背が低く小太りだったが、カルロスはアルバン・ベルクのように背が高かった、と言うのである。一つの関接証拠なのか。おそらくまずそうではない。カルロスの母は夫よりかなり背が高かったのだが、その母のことが常に顧慮されなかったからである。総じて、カルロスは外見では母譲りのものを多く持っていた。クライバー一家の旧友のうち、アルゼンチン出身の男性で、ルースが亡くなるまでルースと連絡を取っていた一人は、ルースとカルロスは、著しく目を引くほど似たところがあるとまで言った。カルロスもまた、何よりもまだ若かった頃の父を思い出させる。その当時の父はまだ細身で、禿げずに写真にポーズを取っていたのである。だがやはり興味深いのは、カルロスが円熟してからの何枚かのスナップ写真である。例えば、リッカルド・ムーティと一緒に写った写真である。クライバー父子の生涯において、その時期を問わず、すべての写真においてやはり注意していただきたいのは、目の部分である。カルロスが多くの特徴で、一人間としても芸術上も、父にあれほど似ており、父の特徴や特性の多くを共にしていたということは、強い個性、父の影響、さらにはカルロスが父に対して抱いていた賛美をもって説明で

きよう。しかしその点において、二人の血のつながりを示す重要な指標が見えることは、確実にいっそう明白であろう。二人が親子であるということを、ヴェロニカ・クライバーは疑わない。「カルロスが私たちの父の息子であることは確かです。」姉のそのような証言には条件的な意義しかなくても、あらゆる入手可能な情報を考慮すれば、二人の親子関係を疑うということは、全くの憶測であることに変わりないであろう。

(写真はルース・クライバー)

2009年11月25日水曜日 11時33分更新